

トルストイ翻訳家・北御門二郎

今期の「世界の短編小説を読む」ではトルストイを特集する。北御門二郎の訳書を推薦している。北御門さんには『ある徴兵拒否者の歩み トルストイに導かれて』という自伝がある。語られるのは「トルストイに心を寄せ、トルストイと共に生きよう」と努力して来た半世紀の歴史である。

北御門さんは日中戦争が勃発した翌年（1938年）、一切の暴力行為は否定されなければならぬとの信念に拠り、兵役につくことを拒否した。決断に至るまでの刻々の苦しい時間、脳裏には一枚の写真が揺らめいていたのではないかと想像する。北御門さんはその写真をハルビン在住のある日本の婦人のアルバムの中に見出したのだった。当時（1936年）、この白哲の青年は、トルストイの文学を深く理解しロシア語で読むことを目的にハルビンに滞在

していた。そのころハルビンだ」と泣くような声で言う。二人の婦人（中村照子夫人と山田夫人。中村夫人の夫君は陸軍中尉、山田夫人の夫君は軍隊のコックだった）は一緒に私を見たが、「だってこれ位しなげや、あいつら懲りやしないのよ。日本人があいつらに捕まってるんじゃない。もっとひどい事をするんだから」と照子夫人が言った。

北御門さんにはハルビンに慕する二人のロシア婦人がいた。エンマ・ミハイロウナさん。徴兵を拒否する直前、郷里の熊本からエンマさんへ宛てた哀切たる手紙の一節が残されている。「多分私は間もなく投獄されると思います。当分、あるいは永遠に、お便りを差し上げることも頂くことも出来なくなるかもしれないと思つて胸が痛みます。でも、どうか私の信念が挫けないように祈って下さい」。また、『トルストイの涙』（澤地久枝との共著）の中で思いを深くして振りかえらる。かつて『アンナ・カレーニナ』を読み議論したとき、エンマさんが微笑みながら告げた、今でもそのロシア語の響きまでが耳に残るといふ一言。それら全てを含み込んだものが「読む」という経験であることを、北御門さんは教えてくれる。

その時は、自分の顔から血の気がさつと失せ去り、眼がくらくらとなるのを覚え、「これはひどい、あんまり

切った。（中略）
こうしてハルビン生活七ヶ月の間に、私はますます「王道楽土建設のために中国青年の首を挟み切る」日本軍国主義を悪み、ますます絶対平和を説くトルストイに思いを潜め

るようになったのであ